

令和5～6年度 施設提案型モデル事業 「最終報告書」

施設名 聖ヨハネこども園

【取り組みのテーマ】

臨床心理士を交えて、こども園と家庭が協働して子育てを行う

【2年間の主な取り組み内容】

子どもたちの育ちにおいて重要なことは、子どもたちを育む環境、保護者との連携によって子育てを楽しみ成長を見守ることが重要と考え、当園では子ども、保護者、地域に「仕える」(ディアコニア)というキリスト教保育の理念のもと子育て支援に取り組んでいる。

臨床心理士を交えての園内研修、毎月のコンサルテーションを重ね、保育者の子どもへの理解を深めること、保護者にとってより相談しやすい環境を提供できるようにと考え、以下の内容に取り組んできた。

- ・月に一度の臨床心理士の巡回、子どもの行動発達の確認のためコンサルシートをもとにコンサルテーションを行う。
- 臨床心理士には事前に保育者が記載したコンサルシートを渡し、月に1回の頻度で訪問する。臨床心理士が子どもの行動観察をした後、担任とのコンサルテーションを行い、保育者との対話の中で保育の手立てを見つけ、子どもたちにより良いかかわりのもと成長を支えていけるようにしている。
- ・要望に応じて保護者と臨床心理士がカウンセリングを行う。
- ・臨床心理士を講師に招き、園内研修を行う。
- ・保護者に対し、子育て講座を開き、臨床心理士と関係を作り、子育てに関して相談しやすい環境作りを行う。
- ・臨床心理士によるコラムを毎月発行の園だよりに記載し、身近に感じてもらう。



臨床心理士が巡回をしている様子



臨床心理士に寄り添われて安心している

【令和5年度活動内容・経過】

〇月に1回の臨床心理士の巡回、コンサルテーションを重ねていく。

事例1 コンサルテーションの流れ

コンサルシート

保育者が日々の保育の中で、どのようににかかわることで、子どもの成長につながるのかと悩んだり、園内で切り替えができずに困っている子どもが、どのように支援することでもっと過ごしやすく、また成長につながるのかと考えたりする時に、コンサルシートに記載する。

1週間前にコンサルシートと当日の巡回順番を臨床心理士と共有する。
巡回順番は、子どもの姿に合わせて、毎回変えている。

臨床心理士が巡回をし、子どもと関わりながら、行動や発達の確認を行う。

担任とのコンサルテーションを行う。コンサルテーションは専門的な知識の基で、子どもの理解を深める。子どもにとってのより良い手立てを話し合い、次回のコンサルテーションまで実践していく。

記録日 2023年5月		
月齢	4月	月
子どもの姿	保育士かかわり	推測される子どもの思い 保育士の思いや葛藤
・自分で遊びを見つける。 友だちと遊ぶよりは、保育者を誘って遊ぶ姿が見られる。	・一人遊びに集中して遊んでいる時はそっと見守り、遊びに誘われた時は一緒に遊ぶ。	・本児にとって友だちより大人の方がかわりやすいのか？本児の思いが通りやすいから？
・散歩前や午睡前に排泄に誘うが気分がのらない時は頑なに嫌がる。	・最近はルールとして排泄にいくよう誘っていたが、気分が乗らないと「やだやだ！」と泣き崩れるため、今は本児の気持ちを優先して行動している。	・決まり事や、ルールを守ることの大切さを重視して保育を行っていったら良いのか、子どもの気持ちを優先した保育が良いのか葛藤がある。
・寝起きが悪かったりその日の本児の気分で「全てのことに嫌だ！」となってしまう。	・最初は落ち着くように対応するが、切り替えがなかなかうまく出来ない場合は、保育者と一緒に行う。	・本児がパニックを起こしている状況。どうしたら気持ちが切り替わるのかその日の状況にもよるため、まだ掴めない。
・食事面では集中力が長く持たない。「おしっこ！」と排泄を何度もうったえる。椅子からおりようとする。	・集中力が切れる前に食べる支援をする。歌を歌ったり、楽しく食べられる声かけをしたりする。	・他の事が気になってしまう。注意散漫な状態。食べる事が好きではないのか？
・気になる点 一度嫌だ！のスイッチが入ると、なかなか保育者の声かけでも切り替えることが難しい。都合の悪いことがあると「これ何？」「おしっこ」と話をそらすように言う。注意散漫で散歩先ではよく転びアザや傷をつくることが多い。		
聞きたいこと ・気持ちの切りかえ方の工夫（パニックになった時） 食事をスムーズにとる方法 何を一番に優先した保育をとるべきか		
その他		



担任とのコンサルテーションの様子

コンサルテーションを行なった後に、話し合ったことを報告書に記載し、回覧する。

見えてきた成長や、新たな課題などを職員みんなで共有し、園全体で子どもの成長を見守っていく。

コンサルテーション報告書		2023年5月
4歳 7月		
・集団ゲームで玉入れを行う。本児は待つことが苦手で自分の番になるまで「イヤイヤ」と違う場所へ遊びに行く。自分の番になると玉入れに参加する。 →玉入れの楽しさがわかっていない様子。もっと単純にカゴの中にボールを入れるコーナーや普段からボーリングなど「倒れた！やったー！」という達成感や楽しさを味わえるゲームを用意しておく。 ・初めての集団ゲームは一度で終わらず継続的にやっていく。 →自分のタイミングで輪に入ってくる。本児なりに周りの様子をしっかり観察している。外に飛び出さないだけで成長が見られる。 ・初めての集団ゲームや初めての活動に対し、保育者は声をかけ誘うが、決して無理強いをさせない。嫌いにさせることが一番良くない。クールダウンできる場所も作っておく ・たくさん身体を動かして遊ぶことで、身体的基础ができて気持ちをコントロールできるようになる。 ・集団ゲームでも各年齢に合わせる。 →3歳児は1番集中力が短いからこそ時間を短くして、5歳児が最後まで遊ぶのでもよかった。 ・お互い助け合う集団へ。 →支援が必要な子にも手をさしのべられる以上児を育てていく。その子その子の良いところを伸ばしつつ、足りないところは助け合えるように保育者も声をかけ関わっていく。		

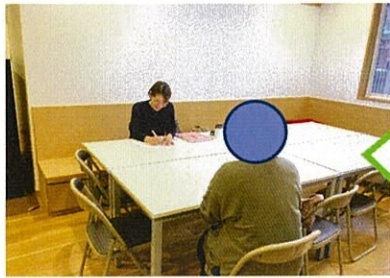
○臨床心理士が保護者にカウンセリングを行うことに繋がった事例

事例2 ○○ちゃん2歳2ヶ月は、喃語ですずっと話していること、名前を呼んでも意識がこちらに向かないことが気になっていた。

担任とのコンサルテーションでは、本児の園での関わり方と、保護者への関わり方も話し合う。園で困っていることは、ご家庭でも困り感となっていることがあり、後日保護者懇談を行うことにした。その中で、臨床心理士とのカウンセリングを提案すると是非との希望があり、臨床心理士の訪問日にカウンセリングを行なった。

コンサルシート

記録日 2022年12月		
月齢 2歳 7月		
子どもの姿	保育士かわり	推測される子どもの思い 保育士の思いや葛藤
・オムツ交換に誘われトイレに来るがトイレの中で立ちつくしている。	・「○○ちゃんオムツ替えるよ。タオル出してね」と声をかける。	・トイレにおむつ交換をしに来ていることはわかっているのか。
・保育者の方を見ることはなく、名前を呼ばれても反応せず、「アーアー」と喃語で声を発している。	・本児をタオルの上に座らせズボンをはくよう言葉をかける。足をこそがしたり、触ったりすると以前は脱ぐことに意識が向いたのでやってみるが、最近では喃語ですつと話している。	・本児のマークのラックからお尻の下に敷くタオルを出して見せるが、自分のマークもわかってないのではないかと。思う。
・歩く時は足で、歩幅も狭いが、嬉しそうに歩き回っている。段差に慎重で、前に段差があると、段差の前で足踏みをして自分のタイミングで段差を越えている。	・「ゆっくりでいいよ」と声をかけ無視しないようにする。	・今は、声を発していることが楽しいのかな。一緒に声を発するとこっちは見て笑っている。
・歩くときは足で、歩幅も狭いが、嬉しそうに歩き回っている。段差に慎重で、前に段差があると、段差の前で足踏みをして自分のタイミングで段差を越えている。	・「ゆっくりでいいよ」と声をかけ無視しないようにする。	・歩くことが楽しいのだろう。今の時期散歩に出かけることは難しいので、室内で発達を誘う運動遊びをしていきたい。
気になる点 ・最近特に名前を呼んでもこちをみなくなったこと ・喃語ですつと声を発している事が多くなった（遊び、着脱、食事中）		
聞きたいこと ・ずっと楽しそうに声を発している本児に対し、どういう風に言葉をかけ、こちらに意識を向けてもらえるか ・運動発達を誘う遊びについて		
その他		



臨床心理士と保護者がカウンセリングをしている様子。プライバシーが守られた中で、安心して話ができるよう配慮している。
* 特別に撮影許可をいただきました。

繊細で、情緒面に不安定さを感じる子どもの保護者対応の中で、保護者から、臨床心理士とのカウンセリングを希望されることもあった。臨床心理士からより専門的な観点でカウンセリングを行い、話をする中で、育児の方向性を見つけることができた事例もあった。

○臨床心理士を講師に迎え「保育者が行う保護者支援の工夫と困難」のテーマで園内研修を行う。保育現場の保護者支援の難しさに関するアンケートや、数値データをもとにした講義を聞き自園のクラスを振り返り話し合う。保護者と距離を縮めることができたきっかけを共有し、困っていることも話し合った。

子どもの気になる様子を保護者に伝える難しさ、次の支援に繋げる難しさを、臨床心理士と共に保護者に伝える時期や伝え方を話し合い、多方面からアプローチしながら、保護者の心に寄り添う支援を目指していきたい。

○8月に行った臨床心理士を講師に招いての子育て講座では、子育てのヒントになった、すぐに実践できる具体的な方法が提案され帰宅してやってみたとの報告もあった。講習会を通して実際に会い、話を聞くことで、臨床心理士が身近な存在となったのではないかと感じる。

【令和5年度の気付き、学び、令和6年度に向けてのポイント】

臨床心理士とのコンサルテーションを重ね、知識が深まり保育者自身のスキルアップにつながった。コンサルシートを詳細に記述することで、その子の分析になり、新たな気づきもあった。記述することで、気になること、わからないことも冷静に見ることができるようになった。臨床心理士を講師に招いての子育て講座では、臨床心理士の人柄も伝わり、より身近な存在になったと思われる。しかし、悩みがある保護者から臨床心理士と話がしたいと伝えにくい方も中にはいることも考えられ、日々の保護者対応の中で、保育者とのコミュニケーションを大切に信頼関係を深めることで、保護者の思いに気づいたり、心の中の思いを引き出したりできるようにしていきたい。

【令和6年度活動内容・経過】

○前年度に引き続き、臨床心理士とのコンサルテーションを行っていく。

保育者が子どもの発達において、どのように支援していけば良いか、また、保護者とどのように協働していけば良いか、コンサルテーションを重ねた事例。

事例 3-1 あーちゃん、1歳7ヶ月はずり這いでよく移動していたが、言葉は単語を少し話す様子で、保育者は発達の遅れを感じていた。この時期は2月で、来年度1歳児クラスに進級することは無理がかかるのか、0歳児クラス的环境の方が発達に合っているのかと担任間で悩んでおり、保護者からも進級について質問がある状況であった。この様子をコンサルシートに記載し、臨床心理士とのコンサルテーションを行った。

記録日 20××年2月

月齢 1歳7ヶ月	子どもの姿	保育士のかかわり	推測される子どもの思い 保育士の思いや葛藤
	・ずり這いでよく移動する。 つかまり立ちは自分からまだしようとなし。	・「あーちゃん、おいでこっちから、いないいないばあしよう」と声をかけ縦（高さ50センチほど）越えに置く。 ・「あーちゃん、ここよ」と言って縦を握ることを仕草で伝える。	・縦越えに置くことで、縦に寝まろうとするかな？
	・ずり這いでやってくる。 保育者を見て「ん、ん」と言って訴える。 ・保育者の真似をして縦を握る。	・「にぎにぎしたね」「いないいないばあ」と言って縦を握るの上から覗かせる。 ・「あーちゃん立ちしてみようか」	・立ちたいのかな。
	・横しように保育者の顔を見て「ばあ」と言って、保育者に手を伸ばす。 ・保育者に変えられて立ち上がると、縦を握って一人でつかまり立ちをする。 ・ニコニコ笑って「ばあ」と言いながら体を揺らしている。	・体を支えてゆっくり立ち上がらせる。 ・自分からも立ちあがろうとしている。	・視界が高くなって怖そうだな。
気になる点	・四つん這いのポーズからお尻を持ち上げたり、数秒ハイハイのポーズを自ら行うが、月齢から見ると発達の遅れが見られる。		
聞きたいこと	・1歳児クラスに進級することには本児に無理がかかるのか、0歳児クラス的环境の方が今の本児の発達に合っているのか。また、母親からも進級についての質問があった。		
その他			

20××年2月

園児名 あーちゃん 1歳8ヶ月	参加保育士	記録者
・臨床心理士が保育室に入ってきて、固まらず表情も良かった。 前回のコンサルテーションでアドバイスいただいた、本児の好きな玩具や、保育者とのやり取りの中で、体の動きを誘うことを続けてきたことで、運動発達面での発達が見られている。今日は、好きな玉転がしの玩具に誘われて、立方体のクッションにつかまり立ちをして上る姿が見られた。また、つかまり立ちをする時は、つかまる場所や、足を使って立ちやすいポジションを自分で探す姿も見られた。玉転がしでボールを落とすことで、友だちと取り合いをするなどやり取りが見られた。つかまり立ちなどで、うまくできた時は見てと視線をおくったり、まだできなかった時は悔しがって泣いたりする姿が見られた。 臨床心理士より、 ・先月とは、全く違う姿で運動面、情緒面の成長を感じた。 自分でやってみようと思える姿も見られるので、伸びるのも早い。 友だちとのあそびの様子を見て、このまま進級しても友だちがいることで安心して過ごせるのではないかな。 ・進級については今日の姿を見ると1歳児クラスに進級して大丈夫だと思えるが、1日を通して完全に進級することは難しい所もある。0歳児クラス、1歳児クラスで助け合いながら、相談して対応できるか、また話し合っていくと良い。保護者は、0歳児クラスに残留しても良いとおっしゃっていることから、しばらくは0歳児スタートで、できることから1歳児クラスに行っても良いのではないかな。でも、在籍は1歳児で良いと思う。 ・本児は腕で体を支える力は弱いことから、ハイハイせずに歩くかもしれない。 知能の遅れは見られないので、進級の目安は歩くまで待たなくて良い。 ・懇談で保護者と保育者が本児に対して同じかわり方や、言葉かけをしようとして話し合う。そうすることで本児にとってはわかりやすく、理解につながる。来年度も保護者との懇談を継続していくのは良いこと。		

あーちゃんは好きな玩具で誘うとつかまり立ちをするようになり、友だちとの関わりが増え、運動面、情緒面でも成長が見られていた。コンサルテーションでは、伸びているスピードが速いこと、やってみようとする意欲や友だちとのかわりの様子から1歳児クラスに進級しても安心して過ごせるのではないかと話し合った。保護者は0歳児クラスに残留しても良いとの思いもあり、在籍は1歳児クラスにするが、0歳児クラスで過ごしながらか活動を見て、できるところから1歳児クラスに入っていくことになった。

事例 3-2 新年度を迎え2ヶ月が経つ頃あーちゃんは1歳児クラス的环境に慣れ、運動面では階段を四つ這いで上り下りして発達を誘っていた。この時期、保護者から、噛みつかれることがあると相談があった。園では見られていないが、どのように対応していけば良いか悩んでおり、話を聞いた担任と臨床心理士とのコンサルテーションを行った。

記録日 202×年5月

月齢 1歳10ヶ月		
子どもの姿	保育士かかわり	推測される子どもの思い 保育士の思いや葛藤
1歳児クラスで過ごしている。環境にもスムーズに慣れ好きなあそびを楽しんでいる。意欲的にずり這いで移動している。	次の活動へ移る時は、一緒に行こうと声をかけ側に付き、自分で動けるよう見守っている。	環境の変化に不安定なことも予測したが、そのような姿は見られず、安定して良かった。
階段の上りは手、足と交互に出してスムーズであるが、下りるのは怖さもあるのかごこちない。	階段の上り下りが、四つん這いになることの練習にもなるアドバイスをいただき、階段にも誘っている。	階段の上りはだいぶスムーズになってきている。下りるのは怖さもあるようなので、足の出し方を誘導して下で支えていこう。
保護者や友だちに雑語で喋りかけ、機嫌よくいる。絵本を見ると、「バナナ」と言い指さしをする。	雑語には優しくこたえたり、「バナナだね、美味しそうね」とこたえる。	意欲的に話しかけているので、しっかりと応え、コミュニケーションをとる楽しさを感じられるようにしたい。
気になる点		
聞きたいこと ・保護者から、噛みつくことがあるという相談があった。園では見られていないが、どのように対処していけば良いか。		
その他		



スロープの傾斜を利用して遊んでいる様子。
スロープを上り下りしながら楽しく遊べるように工夫し、バランス感覚を養ったり、足腰の発達を促したりしている。

20×年5月

園児名 あーちゃん 1歳10ヶ月	参加保育士	記録者
・成長が著しい。挑戦しようとする力もついてきている。 保育者が今行なっているかかわりを継続的に続けていくと良い。 ・身体発達が1年くらい遅れているので、言葉も1年くらい遅れると予測される。しかし、口の機能ものびてきているので、言葉もでてくるでしょう。 ・保護者を噛む行為に対しては、本児の様子から“遊びたい”を示している。本児が関心している好きなあそびを母親に知らせていき、噛むことがあそびでなく、好きなあそびを母親と楽しめるようにしていく。		

コンサルテーションでは、成長が著しく、今行なっているかかわりを継続的に続けて良いとアドバイスをいただいた。保護者を噛む行為は、あーちゃんは遊んでいるつもりのところがあるので、保護者には、園での本児の好きな遊びを知らせていき、噛むことでなく、遊ぶことを楽しめるようにしていくことを伝え、実践していくことになった。

事例 3-3 あーちゃんは言葉も二語文が出てきた。しかし、この頃思い通りにならなかった時や、楽しくて興奮した時に自分の唇を噛む様子が頻繁に見られるようになった。

記録日 20××年7月

月齢 1歳11ヶ月		
子どもの姿	保育士かかわり	推測される子どもの思い 保育士の思いや葛藤
・歩けるようになり、物を持って歩き、スロープの上り下りもして歩いている。	転倒しないよう見守りながら、おいでと声をかけ誘ったり、一緒に歩いたりしている。	歩くことが楽しい様子。スロープを利用して、バランス感覚も養いたい。
・登降園時はこれまで抱っこしたが、靴を履いて手を繋いで歩いている。	「あーちゃんのお靴素敵だね。お靴履こうか」と誘う。	母親も本児が歩くようになったことをとても喜んでる様子だ。秋には散歩に靴を履いて出かけた。
・「まんま ない」「こっちいった」などの二語文がでてきている。	・本児の言った言葉を繰り返して、「まんま ないね」と受けとめたり「○○はどこ？」と尋ねてやり取りを楽しんだりする。	・本児とのやり取りを楽しみながら、発語を誘いたい。
・思い通りにいかないことがあった時や、楽しくて興奮した時など唇を噛むことがある。	・「あーちゃん、嫌だったんだね」「これ、おもしろかったんだね」と気持ちを受けとめる。	・何かもどかしい思いがあるのか、どうしたら噛むことをしなくなるのか。
気になる点 ・感情が昂った時に、自分の唇を噛む行為が見られるようになった。		
聞きたいこと ・どうして噛む行為をするのか、また、噛んだ時の対応はどのようにするか。		
その他		

20××年7月

園児名 あーちゃん 2歳	参加保育士 ■■■	記録者 ■■
・1歳3、4ヶ月の発達が見られる。 順調に道筋をたどって成長している。大人とのやり取りができていく姿があり、遅れは感じるが、対人関係は順調である。		
・言葉の模倣が見られており、模倣が出てくると学習能力が増える。指と口はつながっている。言葉の発達を誘う為に、指、手をしっかり使っていくと良い。		
・噛む行為について 噛むことで落ち着こうとしている。くせになっている。自傷行為にもなっておりやめられるようにしたい。唇を噛むのではなく、代替えの物を用意すると良い。安全性のある布製のものが良い。発達が進むと落ち着いてくるかもしれないが、色々試してみると良い。気持ちを言葉で補いながら落ち着いていくようにしていく。		

コンサルテーションでは、1歳3、4ヶ月の発達が見られる、順調に道筋をたどって成長しており、遅れはあるものの、対人関係も順調とのことと話し合った。言葉の模倣が見られており、指と口は繋がっているから、言葉の発達を誘うために遊びの中で指、手をしっかり使っていくという、次の手立ても見つかった。噛む行為については自傷行為にもつながってしまうことから、唇を噛むのではなく、布製のハンカチなど代替えの物を用意することになった。発達が進むと落ち着いてくるかもしれないが、あーちゃんの様子を見ながら色々試していくことになった。

あーちゃんの噛む行為を防ぐことはハンカチではなかなかうまくいかず、コンサルテーションを重ね、言葉かけを工夫し、試行錯誤してかかわり、成長もしていく中で噛む行為もなくなっていった。

あーちゃんの事例では、コンサルテーションを重ねながら、子どもが成長していく過程の中で見えてくる新たな課題や対応の仕方を、その都度保護者と共有し、共に考えていくことで、保護者との信頼関係もさらに深まっていったと感じられた。

○臨床心理士を講師に、保護者向けに子育て講座を実施する。

講座では、保護者同士互いの話を聞いたり、褒めあったりするグループディスカッションも行われた。参加した保護者からは、臨床心理士の話を聞いたり、保護者同士話したりする中で、うまくいかずに悩んだり、時々自己嫌悪に陥ってしまったりすることも自分だけではないと共感し、自分を褒めて前向きに育児に向き合えるようになったとの声が聞かれた。

【令和5～6年度の活動の成果・考察】

○コンサルテーションを重ねてきて、保育者が感じていること

- ・ 保育者（担任）同士ではわからなかった子どもの行動や姿を臨床心理士に説明されることで理解が深まった。
- ・ 支援の方法を的確に話し合い、具体的な方法を教えてもらい実践もしやすい。担任同士で話し合っただけの方法を相談すると、その方法が合っている時はそのまま続けて良いと、はっきりおっしゃってくれて私たちの自信、安心にもなっている。
- ・ 臨床心理士に保育のしんどさや、その子の話にうなずいて共感してもらい、「先生たち、大変だね」と言ってもらえ、とても気持ちが軽くなった。また、違った目線でのアドバイスをもらえたので、挑戦する意欲につながった。
- ・ 「今後、保育者がこのようにかかわることで、こう成長していくよ」と、見通しを持った成長への関わり方を学ぶことができた。今のかかわりが良いのか、と迷った時にわかりやすい説明と適切なアドバイスがあり、保育者同士で納得し、共通理解のもとすぐに保育に取り入れられた。
- ・ 朝の玄関や、合同クラスの時などで他のクラスの子どもの行動で気になることがあれば相談し、園全体で共有できるようにしたいと感じた。

コンサルシートを記載することが保育者にとって、子どもの理解につながることに気付いたこと、臨床心理士の目線での支援方法を学ぶことができたことに加え、保育者の心理も理解してもらいながらコンサルテーションを重ねていく中で、さらなる意欲に繋がったことが良かった。また、園全体で共有することが大切と感じられたことも良かった。

臨床心理士による保護者向け子育て講座では、昨年に引き続き参加される保護者や、講座の後に臨床心理士とのカウンセリングを希望される保護者の姿からも臨床心理士との関係も築けてきていると感じた。

【公開保育について】

○公開保育の内容

- 1、当園での取り組みを、スライドを交えて伝える。
- 2、参加者は園内の見学。
- 3、5つのグループに分かれ、事前に記載していただいた、コンサルシートをもとに、臨床心理士とのコンサルテーションを順に行う。他のグループが、コンサルテーションを行っている間は、それぞれのグループがコンサルシートの事例をもとに話し合う。
- 4、コンサルテーションで話し合われたことや、感じたことを全体で共有する。
- 5、臨床心理士を講師に、『一人一人の子どもによりよい発達のために ～子どもの姿と保育者の関わりから振り返る～』のテーマでの講義を受ける。

○参加者の感想

- ・子どもたちと関わる中で、今の自分の発言は良かったのかと自問自答しているが、今回、たくさんの先生方と話をし、同じ気持ちの先生ばかりだったことに気づけた。臨床心理士からの助言は、スッと入ってきて、また明日から頑張ろう、子どもたちと楽しいことをしよう、とパワーをもらえた。保育園は「自分が好きと思える場」であること、子どもはもちろん、自分自身もそんな職場でありたいと思った。
- ・問題行動だけに着目せず、いろんな角度から子どもを捉える大切さを改めて感じたとともに、コンサルテーションを自園でもやってみたいと思った。子どもが、どんな要求をしているのか、なぜそのような行動をとるのかなど、いろいろな視点から職員間で日々話し合っていきたい。もっと、発達の部分、脳の機能などの専門的なことも学んでいきたいと思った。
- ・子どもの気になる行動に目を向けがちだが、よいところに目を向けて認める声かけをする、気になる行動、困った行動の前に何があったかよく見て観察して分析する、を心がけ、予防的な対応をし、子どもに自分が好き、人が好きの気持ちを育てていきたい。



コンサルテーション
の様子



午後からの講義
の様子

公開保育は、当園が取り組んできた、コンサルテーションを参加者の方にも体験していただくことを目的として行った。事前に記載していただいたコンサルシートを基に、臨床心理士とコンサルテーションを行うことで、新たな手立てが見つかったことに加え、“困った行動”の前に何があったのかということに着目して、分析し、その行動にならないようにすることで、結果的に子どもが困らないようにする保育の方法を学ぶことができたのではないかと、参加者の感想からもうかがえた。また、午後からの臨床心理士の講義では、各グループのコンサルテーションで話し合われたことを紹介しながら、保育者の役目として、子どもにとって最も経験すべきことは「自分を好きという感覚、家族や友だちや周りの人を好きだという感覚を育てること」ということが参加者のみなさまと共有でき良かった。

【今後に向けての取り組み】

今までの保護者支援では子どもの姿を伝えた時に、一緒に子どもの姿を想像し合える保護者と、想像することが難しく壁を作る保護者、子どもの姿を想像するが時期が来たら成長するのではないかと願う保護者など様々で、次の支援に繋げる難しさを感じていた。臨床心理士が間に入ることで、日常的に子どもの発達についての話ができるようになり、保護者の特性に合った対応も教えてもらえたので、試行錯誤しながらもスムーズに対応できるようになってきた。日々の連絡帳や送迎時のコミュニケーションの在り方についても、より深い信頼関係を得る為に、保育者自身がコンサルテーションの中で振り返りながら実践しているところである。

また、コンサルテーションにおいても、巡回で見てほしい子どもが休みだったり、見てほしい姿のタイミングが合わなかったりすることもあった。話し合う時間をもっと長くしたい、時間が足りないとの声も聞かれたので、動画での共有や、ケース会議など様々な取り組みを始めていきたい。

臨床心理士を招いての子育て講座では、後日参加された保護者から臨床心理士とのカウンセリングを希望された方もおり、講座を通じて実際に会い、話を聞くことで臨床心理士がより身近な存在になったのではないかと感じる。より多くの保護者に講座に参加してもらえるようアプローチの仕方を検討したい。カウンセリングを終えた保護者の心が軽くなったことが表情からもうかがえた。しかし、気軽に相談ができる反面、自ら申し出にくい保護者がいるのではないかと、困っている保護者がいるのではないかと、日々の保護者対応の中で気づいて繋げていけるようにしたい。

【所感】

当園では、2021 年度より臨床心理士を交えてこども園と家庭が協働して子育てを行う取り組みを行ってきた。子どもたちは日々成長をしており、成長の過程で見られる新たな課題についても、コンサルテーションを重ねてきた。専門的知識の基で話し合い、その手立てを基に子どもとかかわり、保護者とも連携していく中で、保護者と成長を喜び合い、前向きに子どもたちの関わりについて話し合い、保護者対応にもより積極的に自信を持って関われるようになったと感じている。保育士が自信を持って保育をしたり、スキルアップを感じたりすることに繋がったことが良かったと感じる。

2023 年度 2024 年度施設提案型モデル事業を通して公開させていただいた。公開保育を通してこの取り組みを知っていただけたこと、また当園にとっても、保育に携わっている仲間と共に子どもたちのために話し合い、充実した 1 日になったことが、さらに邁進していこうという意欲につながったと感じている。